

被排斥者への共感による心理的痛みの伝染についての実験的検討

長崎女子短期大学幼児教育学科 中 島 健一郎¹⁾

Experimental study of infection with social pain by empathizing with excluded individuals

Preschool Education Section, Nagasaki Women's Junior College, NAKASHIMA, Ken'ichiro

要 約

現状の保育者養成では、保育者が子どもの存在を受け止め、子どもの心持ちを感じ取ることが重要視されている(無藤, 2007)。その中で、人とかかわりの中で傷ついた子どもに対して共感を示すことによって、保育者もまた心に傷を負っている可能性がないだろうか。本研究は、(1)被排斥者に共感を示すことによって、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか、そして仮に心理的痛みが伝染する場合、(2)その痛みをどのように制御すれば良いのか明らかにする。そのために、本研究では保育者養成校の女子短期大学生を対象とした実験を行った。その結果、(1)推測された被排斥者の心理的痛みと共感する側の個人(共感者)の知覚した心理的痛みの間に正の相関、(2)共感者の知覚した痛みとネガティブ感情の間に正の相関が、そして、(3)共感者のネガティブ感情と不適応反応(衝動性と回避動機の強まり、そして接近動機の弱まり)の間に正の相関が認められた。さらに、(4)幸福感が高い、あるいは抑うつ傾向が低い共感者ほど、知覚したネガティブ感情が低いことが示された。以上より、被排斥者への共感によって心理的痛みが伝染するだけではなく、それに伴う不適応反応を抑えるためには、共感する側の幸福感や抑うつ傾向が重要な役割を担うことが示唆された。

【キー・ワード】 共感, 社会的排斥, 心理的痛みの伝染

Abstract

It is important for nursery teachers to accept and understand the feelings of children. However, doing so may result in injury and suffering to the teachers themselves, particularly when they empathize with children suffering from psychological pain caused by social exclusion (social pain). I investigated whether social pain can be infected through empathizing with excluded individuals. I also examined how the infected pain of empathizing individuals can be reduced and their maladaptive responses be regulated. An experiment was conducted with female students in a nursery teacher training school. The results showed that there was a positive

¹⁾ 現所属 広島大学大学院教育学研究科

relationship between social pain of excluded individuals that the empathizer assumed (assumed social-pain) and social pain that the empathizer perceived (perceived social-pain). Moreover, positive relationships were observed between perceived social-pain and negative emotions perceived by the empathizer and between negative emotions and maladaptive responses of the empathizer. Finally, the empathizer that feels high level of happiness or has low level of the depression tendency perceived low level of perceived negative emotions.

【Key words】 empathy, social exclusion, infected social pain

問 題

子どもに共感し、その存在を受け止めることは保育の最も基礎にあることである(無藤, 2007)。とりわけ、保育者は、他の子どもからいじめられたり、遊びの仲間に入れてもらえなかったりした子どもの心の痛みに関心し、受け止めることが求められる。なぜなら、そのような保育者の存在が子どもたちの心の傷を癒し、子どもたちがあらためて人とのかかわりの中に赴くことを促すためである(森下, 2007)。

しかしながら、このような被排斥者への共感プロセスの中で、看過できないひとつの現象が生じる。それは *empathy gap* である。*empathy gap* とは、排斥された個人が感じた心理的痛みを、それ以外の人々が低く見積もってしまう現象である(Nordgren, Kasia, & MacDonald, 2011)。保育場面で例えた場合、これは仲間外れにあった子どもが感じた心の痛みよりも、保育者が推測した痛みの程度が小さいという形で表れる。つまり、保育者は“そのような出来事に遭遇したら、確かに辛いだろう”と考えるものの、その辛さの程度を子どもが実際に感じているものよりも軽く捉えてしまう。このズレが傷ついた子どもに対する不十分なケアを引き起こす可能性がある。

では、*empathy gap* はどのように低減すれば良いのであろうか。先行研究では *experience sharing* に基づく共感とその解消に有効であることが示唆されている(Zaki & Ochsner, 2012)。*experience sharing* とは共感のあり方のひとつであり、具体的には共感する側の個人が被排斥者の心理的痛みを共有することである。これは“あなたの痛みは私の痛み”として考えることと比喩される。一般に、人々は恋愛パートナーや友人に *experience sharing* に基づく共感を示すことが報告されている(Feeney & Lemay, 2012; Meyer, Masten, Ma, Wang, Shi, Eisenberger, & Han, 2013)。

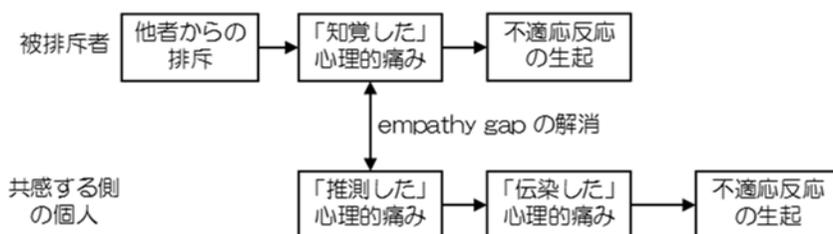
しかしながら、*experience sharing* に基づく共感には、共感する側の個人に一定の犠牲を強いる可能性がある。この点に関して、最近の脳機能画像研究では、排斥された友人に対して共感する場合、共感する側の個人において前部帯状回背側部(dorsal anterior cingulate cortex)の賦活が認められることが示されている(Meyer et al., 2013)。さらに、Meyer et al. (2013)は、排斥された他人(stranger)に対して共感を示す場合には、この賦活が認められないことを示している。また、他の研究では他者から排斥されたときに前部帯状回背側部が賦活するだけでなく、その賦活の程度が被排斥者の心理的痛みと正の関連を示すことが確認されている(Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003)。これらの知見に加えて、Feeney and Lemay (2012)の知見を考慮すれば、*experience sharing* を通して、上

述した比喩が実際に現象として表れる，すなわち共感する側の個人に被排斥者の心理的痛みが伝染することが予測される。さらに，被排斥者が自己調整に失敗する，攻撃性を高める，あるいは他者との接触を避けるといった様々な不適応反応を示す傾向にあること (Smart Richman & Leary, 2009) より，心理的痛みの伝染に伴って共感する側の個人もまた不適応反応を示すことが予測される (図 1)。

現在の日本では保育者がワークストレスを抱えやすく，そのために園児と十分なかかわりを持つことが難しくなっている (西坂，2002; 坂田，2000)。このようなストレスフルな状況の中で，さまざまな個性を持つ子どもたちに対して共感的な態度を示すのは必ずしも容易なことではない。さらに，これまでの保育者養成では，*experience sharing* に基づく共感が推奨されている (無藤，2007)。もし *experience sharing* が心理的痛みの伝染を引き起こすことが明らかになった場合，保育者は排斥された子どもに対して共感的に接することによって，自身もまた同じように心に傷を負うことになる。つまり，ストレスフルな状況に置かれながら，その中でも保育の基礎を大事にしている保育者ほど傷ついた子どもたちと積極的にかかわる。そして，一連のかかわりの中で自らの心を傷つけている可能性がある。

以上より，本研究では，(1)被排斥者に共感を示すことによって，被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか，そして仮に心理的痛みが伝染する場合，(2)その痛みをどのように制御すれば良いのか明らかにする。これらの点について検討するために，本研究では保育者養成校の女子短期大学生を対象とした実験を実施する。

友人への共感プロセス



他人に対する共感プロセス

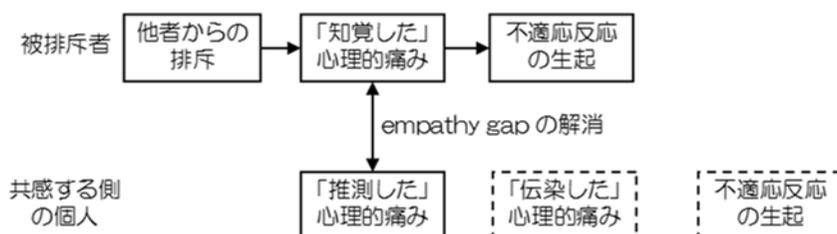


図 1 被排斥者への心理的痛みの伝染に関する検討モデル

方法

今回の実験は、以下に示すような3つのセッションから構成されていた。

① 会話実験

会話ゲームを用いた実験を実施し、被排斥者の様子を動画で撮影した。具体的な方法を以下に示す。

実験参加者 保育者養成校に所属する女子短期学生12名(うち、8名は実験協力者)であった。普段の大学生活の様子を考慮しながら、実験者と心理学系ゼミの学生(7名)が合議の上で、実験参加者と実験協力者を選定した。実験参加者の選定基準は、実験方法や実験内容への疑いを持ちにくく、素直な反応を示すことが期待できるかどうか、そして実験協力者の選定基準は、実験者の意図した言動、すなわち協力者として適切な振る舞いができるかどうかであった。それぞれ選定した後、個別に実験参加の依頼を行い、了承を得た。

会話実験のメンバー構成 実験参加者が所属する学科は、授業カリキュラムの都合上 YA クラスと YB クラスに分かれている。そのため、講義形式の授業には合同で参加するものの、演習形式の授業にはクラス別に参加する。当初、会話実験は同一クラスに所属する6名をひとつのグループとして行う予定であった。しかしながら、YA クラスの参加予定者(1名)が実験をキャンセルし、それに伴って YB クラスの学生を1名加配したために各クラスの参加者数に偏りが生じた。具体的には、ひとつのグループ(以下、グループ1)が YA クラスの学生5名と YB クラスの学生1名、もうひとつのグループ(以下、グループ2)が YB クラスの学生6名であった。

実験実施日 2012年7月下旬であった。

実験手続き それぞれのグループの2名が他の学生から受容される場面(以下、受容場面)、そして他の学生から排斥される場面(以下、排斥場面)を撮影した。会話実験の具体的な手続きを以下に示す。

事前説明

上記の基準によって選定した8名の参加者に対して、実験内容の事前説明を行い、実験協力者として実験に参加するよう依頼した。具体的には、受容場面では6人で仲良く会話を行うこと、特に6人の中で会話に参加できない人が生じないように、会話の文脈を十分に汲み取るよう求めた。排斥場面では、2人1組のペアになるときに誰が誰とペアになるのかを予め決めた上で実験に参加するように伝えた。さらに、ペア決めの最中に“ペアになれなかったら少し悲しい”、“ゲームのためとはいえ緊張する”というように、ペア決めでひとりになるのを嫌がるような言動を行うことを求めた。

実験概要の説明

グループのメンバー6名を小講義室に集めた上で、会話実験の概要について説明した。上述したように、6名中4名が実験協力者であり、2名が実験参加者であった。今回の実験では2つの会話ゲームを行うこと、そしてその様子を撮影することを伝えた。実験協力者・参加者から了承を得た後、全員の表情を撮影できる場所にビデオカメラを設置し、撮影を始めた。

受容場面の撮影と主観指標の測定

会話ゲームの例として古今東西ゲームをあげた上で、メンバーでどのようなゲームを行うか自由に考えるよう求めた。その上で、メンバー全員で楽しみながら会話ゲームを行うよう求めた。ゲームの

実施時間は 10 分程度であった。ここでは、どのようなゲームを行うのかメンバー全員で決めるところから、実際にゲームを行っている様子までを撮影した。実験終了後、実験者が動画を 3 分程度に編集した。

ゲーム終了後、実験参加者と協力者に対して、以下の質問に回答するよう求めた。ひとつは、受容場面での心理的痛みを測定するために、Faces Pain Scale(飯村他, 2002; 以下, FPS)に回答を求めた(1 項目 6 件法)。もうひとつは、場面のネガティブさをどのように評価していたかを測定するために、“あなたにとって、このゲームはどの程度ポジティブ、あるいはネガティブなものだったか”という質問項目に回答するよう求めた(1; とてもポジティブ - 9; とてもネガティブ)。

排斥場面の撮影と主観指標の測定

受容場面の撮影が終わった後、引き続き実験者が提案したゲームを行うよう求めた。そして、そのゲームのために 2 人 1 組のペアを作る必要があることを伝え、ペア決めの方法について説明した。具体的には、メンバーの中で誰と次のゲームを行いたい投票を行った後、実験者がそれぞれの希望者を別室で確認する。お互いにペアになることを希望していた場合、すなわち“両思い”であった場合、そのメンバー同士がペアとなることを伝える。さらに、残りのメンバーで再び投票を行い、3 ペアが成立するまで投票と結果開示を繰り返すと教示した。

実際は、実験協力者同士でペアになるよう依頼していたために、1 回目の投票で 2 ペアが成立した。しかし、この方法では実験参加者同士がペアになり、3 ペアが成立する可能性が残されている。そこで、今回の実験では実験参加者の親友を実験協力者に配置することで参加者同士がペアになることがないようにした。以上の手続きを経て、実験協力者同士の 2 ペアが成立するところまでを撮影した。その後、受容場面と同じように、FPS と場面評価に関する質問項目への回答を求めた。そして、全員の回答が終了したのを確認した後、ディブリーフィングを行い、会話実験を終了した。なお、受容場面と同じように、実験者が動画を 3 分程度に編集した。

② リクルーティング調査

心理学系の講義の時間を利用して行った。この講義は、会話実験の参加者・協力者と同じ学科に所属する学生を対象としたものであった。この調査では、共感実験への参加者のリクルーティングを行うとともに、心理的痛みやネガティブ感情の制御に関する先行研究を考慮した上で、以下の測度についての回答を求めた。心理的痛みの伝染が認められ、かつ不適応反応が生じることが確認された場合に、どのような個人差要因が不適応反応を抑えるのか検討するためである。なお、リクルーティング調査と共感実験に参加することを条件に、当該講義の成績評価におけるボーナスポイントを提供することを約束した。実際には、受講者全員が両方に参加した。

実験参加者 保育者養成校に所属する女子短期学生 77 名

実験実施日 2012 年 11 月上旬であった。

測定項目

(1) 集団同一視尺度(Karasawa (1991)の拡張版; 13 項目 5 件法)

所属学科へのアイデンティティを測定するために用いた($\alpha=.90$)。先行研究では、集団アイデンティティの強さが排斥経験後の情動反応を抑えることが示されている(Knowles & Gardner, 2008)。

(2) 一般的信頼尺度(山岸, 1998; 6 項目 7 件法)

Yanagisawa et al. (2011)では, 排斥経験後の心理的痛みを, 一般的信頼の強さが抑えることが明らかにされた。この知見を踏まえ, 本研究では一般的信頼を測定した($\alpha=.87$)。

(3) 幸福感(1 項目 5 件法)

Oishi(2012)からの示唆を踏まえて, “今の大学で生活することは, 自分にとって幸せなことである” という質問項目への回答を求めた。

(4) Todai Health Index(Suzuki et al., 1991; 10 項目 3 件法)

共感に関する先行研究では, 抑うつ傾向の高い女性が, パートナーの情動を正確に知覚することが難しいことが示されている(Gadassi, Mor, & Rafaeli, 2011)。そこで, 本研究では Todai Health Index を用いて, 個人の抑うつ傾向を測定した($\alpha=.90$)。

(5) 幼少期の社会経済的地位(Griskevicius et al., 2011; 3 項目 7 件法)

幼少期の家庭の社会経済的地位の高さが, 排斥経験時の心理的痛みを抑えることが確かめられている(Yanagisawa et al., 2013)。本研究では, Griskevicius et al. (2011)が用いた測定項目($\alpha=.86$)に加えて, 主観的な階層意識(1 項目 10 件法)と現在の家庭収入(1 項目 5 件法)を測定した。分析の際には各尺度の合成変数を作成し用いた(Kraus & Keltner, 2009)。

③ 共感実験

会話実験によって作成した実験刺激を用いた共感実験を行った。具体的な方法を以下に示す。

実験実施日 2012 年 11 月中旬であった。

実験概要の説明

実験に用いた講義室の広さを考慮し, クラス別に実験を実施した。実験参加者には, 好きなところに着席しても良いが, 参加者間に必ず 1 席以上のスペースを空けること, そしてスライドが十分に見えるところに着席することを求めた。実験を行うにあたり, 私語禁止といった実験中の注意事項について説明するとともに, 実験概要について説明した。この際, 今回の実験が共感をテーマにした実験であると説明した。さらに, 動画の登場人物の中で特定の個人(A さん)に着目し, その個人がそれぞれの場面でのどのようなことを考えていたか, そしてどのような気持ちになっていたか推測することを参加者に求めると説明した。ここで, A さんは先の会話実験で両想いとなれなかった 2 名のうち, 表情やしぐさが分かりやすい場所に座っていた実験参加者とした。グループ 1・2 とともに, 同一の場所に座っている参加者がその対象となった。

以上の説明が終了し, 実験参加者から了承を得た後, 実験を開始した。

実験前アンケートの実施

実験前アンケートの質問項目は, 今回の実験の中で共感対象となった参加者(A さん)との関係性に関するものであった。ひとつは, A さんとの心理的距離に関する質問項目(Aron, Aron, & Smollan, 1992; 1 項目 7 件法)であり, もうひとつは A さんとの日常的な接触時間であった(1 項目 6 件法; 0: まったくない, 1: 1 分から 30 分, 2: 31 分から 1 時間, 3: 1 時間 1 分から 2 時間, 4: 2 時間 1 分から 3 時間, 5: 3 時間以上)。教示文は, “授業のある平日における, あなたと A さんの 1 日の平均的な接触時間 (例えば, 話をしたり, メールをしたりする時間) はどの程度ですか。ただし, 授業での接触

時間は含みません。”であった。なお、アンケート用紙は個別に配布した封筒に入れるよう求めた。以下のアンケートについても同様であった。

受容場面の観察と観察後のアンケートの実施

共感対象である A さんを含めた、受容場面における登場人物の様子について観察するよう求めた。その後、アンケートを配布した。会話実験と同様に、FPS (飯村他, 2002) と状況評価に関する質問項目に回答を求めた。ただし、FPS については、共感対象が受容場面でどの程度心を痛めているか推測した上で回答するよう求めた。”

排斥場面の観察と観察後のアンケートの実施

受容場面の場合と同様に、排斥場面における登場人物の様子について観察するよう求めた。その後、アンケートを配布し、FPS (飯村他, 2002) と状況評価に関する質問項目に回答を求めた。加えて、共感対象が排斥場面でどの程度ネガティブな気持ちになっていたか推測した上で、ネガティブ感情尺度 (柳澤, 2011; 6 項目 5 件法) に回答するよう求めた ($\alpha = .81$)。

実験参加者の現在の心理状態に関するアンケートの実施

受容場面と排斥場面を観察した後、実験参加者の現在の心理状態について回答を求めた。具体的には、以下の測度を用いた。(回答終了後にディブリーフィングを行い、実験終了とした。)

(1) FPS (飯村他, 2002)

共感対象である A さんの場合とは異なり、現在の自分がどの程度心を痛めているかどうかについて回答を求めた。

(2) ネガティブ感情尺度 (柳澤, 2011; 6 項目 5 件法)

(1) と同様に、実験参加者の現在の感情状態について回答を求めた ($\alpha = .64$)。

(3) 衝動性尺度 (7 項目 5 件法)

原田・吉澤・吉田 (2008) の衝動性尺度の一部を修正し用いた ($\alpha = .80$)。項目例として “いま、私は穏やかな気持ちでいる (逆転項目)”, “いま、私は頭に血が上り、自分を見失いそうになっている” があげられる。以下に示した接近回避動機とともに、衝動性は不適応反応の指標として用いられた。

(4) 接近回避動機尺度 (柳澤, 2011; 6 項目 5 件法)

実験参加者の現在の接近回避動機を測定するために用いた。項目例として “いま、私は良い成果をあげることに意識を集中している (接近動機; $\alpha = .75$)”, “いま、私は自分の目標を達成できないのではないかと心配している (回避動機; $\alpha = .74$)” があげられる。

結果

操作チェック

まず、会話実験の参加者の受容・排斥場面における回答結果に着目した。会話実験では各グループに 2 名の実験参加者が配置されていた。計 4 名の回答結果を表 1 に記載した。心理的痛みに関しては、YB - 01 を除く 3 名が受容場面より排斥場面において心理的痛みを感じていた。そして、場面評

価に関しては YA - 01 を除く 3 名が受容場面より排斥場면을ネガティブに捉えていた。

次に、受容場面と排斥場面のそれぞれが、共感実験の参加者によってどのように捉えられていたか検討するために、場面評価に関する測定項目の平均値を従属変数とした場面(1: 受容/排斥, 参加者内) × グループ(1: グループ 1/2, 参加者間)の分散分析を行った。その結果、場面の主効果のみが認められた($F(1, 75) = 126.80, p < .05$)。共感実験の参加者は、受容場面($M = 2.74, SD = 1.85$)よりも排斥場面($M = 6.13, SD = 1.72$)をネガティブに捉えていることが示された。

以上より、本研究の実験操作は成功したと考えられる。

表 1 会話実験の実験参加者の回答

	心理的痛み (得点が高いほど痛みを感じた)		場面評価 (得点が高いほどネガティブだった)	
	受容	排斥	受容	排斥
YA-01 (グループ1のAさん)	1	2	6	6
YA-02	0	1	2	5
YB-01 (グループ2のAさん)	2	2	2	6
YB-02	0	2	2	6

心理的痛みの伝染についての検討

本研究で用いた尺度についての記述統計量を表 2 に記載した。そして、受容・排斥場面の推測した心理的痛みとネガティブ感情、および実験参加者によって知覚された心理的痛みとネガティブ感情に着目した単相関分析の結果を表 3 に記載した。

分析の結果、推測された心理的痛み(排斥場面)と知覚された心理的痛みの間に正の関連が認められた。さらに、Spearman の順位相関係数を算出した場合も同様の結果が認められた($\rho = .31, p < .01$)。以上の結果を踏まえ、説明変数を受容場面での推測された心理的痛み、そして排斥場面での推測された心理的痛みとネガティブ感情とし、目的変数を実験参加者によって知覚された心理的痛みとする重回帰分析を行った($F(3, 73) = 3.82, p < .05$)。その結果、排斥場面での推測された心理的痛みの効果が有意であった($B = 0.31, t = 2.16, p < .05$)。これは、排斥された個人が心理的痛みを感じていると推測するほど、実験参加者、すなわち共感する側の個人もまた心理的痛みを感じることを示している。よって、心理的痛みの伝染が生じることが示された。

表 2 本研究で用いた測度に関する記述統計量

	平均値	標準偏差	人数
共感対象との心理的距離	3.47	1.73	77
共感対象との接触時間（中央値を記載）	1	-	77
推測した心理的痛み（受容場面）	0.51	0.77	77
推測した心理的痛み（排斥場面）	2.64	1.07	77
推測したネガティブ感情（排斥場面）	3.84	0.6	77
知覚した心理的痛み	1.36	1.09	77
知覚したネガティブ感情	2.86	0.66	76
衝動性	1.80	0.58	77
接近動機	3.41	0.75	77
回避動機	3.02	0.95	76
学科アイデンティティ	3.69	0.61	76
一般的信頼	4.38	0.96	76
幸福感	3.81	0.96	77
抑うつ傾向	1.54	0.48	77
社会経済的地位（合成変数）	0	0.81	77

表 3 単相関分析の結果

		推測された 心理的痛み (受容場面)	推測された 心理的痛み (排斥場面)	推測された ネガティブ感情 (排斥場面)	知覚された 心理的痛み	知覚された ネガティブ感情
推測された心理的痛み (受容場面)	Pearson の相関係数*					
	有意確率					
	人数					
推測された心理的痛み (排斥場面)	Pearson の相関係数		0.22			
	有意確率		0.05			
	人数		77			
推測されたネガティブ感情 (排斥場面)	Pearson の相関係数	-0.06	0.59			
	有意確率	0.62	0.01			
	人数	77	77			
知覚された心理的痛み	Pearson の相関係数	0.09	0.36	0.26		
	有意確率	0.43	0.01	0.02		
	人数	77	77	77		
知覚されたネガティブ感情	Pearson の相関係数	0.00	0.03	0.12	0.57	
	有意確率	0.97	0.82	0.32	0.01	
	人数	76	76	76	76	

**有意な相関係数を太字で記載している

伝染した心理的痛みが不適応反応に及ぼす影響についての検討

実験参加者の知覚した心理的痛みとネガティブ感情、および衝動性と接近回避動機に着目した単相関分析の結果を表 4 に記載した。この結果を踏まえ、実験参加者によって知覚された心理的痛みとネ

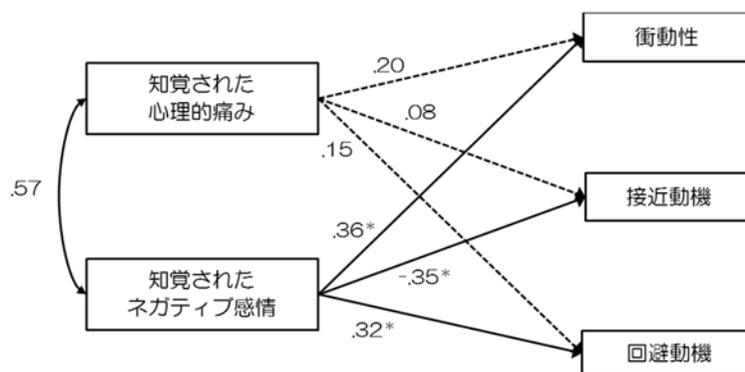
ガティブ感情、そして不適応反応との関連について多変量重回帰分析を行った(図2)。その結果、知覚されたネガティブ感情と、衝動性 ($B=0.32, t=2.98, p<.05$)、接近動機 ($B=-0.41, t=-2.67, p<.05$)、そして回避動機 ($B=0.47, t=2.55, p<.05$) の間に有意な関連のあることが示された。

以上より、実験参加者によって知覚された心理的痛みではなく、知覚されたネガティブ感情の強さが実験参加者の衝動性と回避動機を強め、接近動機を弱めることが示された。

表 4 知覚された心理的痛み・ネガティブ感情と不適応反応に関する単相関分析の結果

		知覚された 心理的痛み	知覚された ネガティブ感情	衝動性	接近動機	回避動機
知覚された心理的痛み	Pearson の相関係数*					
	有意確率 人数					
知覚されたネガティブ感情	Pearson の相関係数	0.57				
	有意確率 人数	0.01 76				
衝動性	Pearson の相関係数	0.41	0.48			
	有意確率 人数	0.01 77	0.01 76			
接近動機	Pearson の相関係数	-0.12	-0.31	-0.11		
	有意確率 人数	0.30 77	0.01 76	0.32 77		
回避動機	Pearson の相関係数	0.34	0.42	0.37	0.57	
	有意確率 人数	0.01 76	0.01 75	0.01 76	0.01 76	

*有意な相関係数を太字で記載している



* $p < .05$ 誤差項の表記は省略

図 2 伝染した心理的痛みが不適応反応に及ぼす影響

知覚されたネガティブ感情を抑制する要因についての検討

先の検討より、実験参加者、すなわち共感する側に生じたネガティブ感情を低く抑えることが参加者の不適応反応を抑える上で重要となると考えられる。そこで、リクルーティング調査時に測定した個人差要因に着目した検討を行った。具体的には、説明変数を学科へのアイデンティティ、一般的信頼、幸福感、抑うつ傾向、そして社会経済的地位(合成変数)とし、目的変数を知覚されたネガティブ感情とした。

ブ感情とする重回帰分析を行った($F(5, 69) = 6.81, p < .05$)。その結果、抑うつ傾向($B = 0.56, t = 3.66, p < .05$)と幸福感($B = -0.22, t = -2.42, p < .05$)の効果が有意であった。これらは、共感する側の個人の抑うつ傾向が低ければ、あるいはその個人の幸福感が高ければ、排斥された個人への共感に伴うネガティブ感情を低く抑えることができることを示している。

考 察

本研究の結果より、排斥されたクラスメイトが心を痛めていると推測した個人ほど、自身もまた心を痛めていることが示された。脳機能画像研究(e.g., Eisenberger et al., 2003; Meyer et al., 2013)から示唆されるように、共感に伴う心理的痛みの伝染が生じたと考えられる。さらに、本研究では伝染した心理的痛みではなく、共感する側の個人が知覚したネガティブ感情が衝動性の高まりといった一連の不適応反応を引き起こすことが明らかになった。先行研究では被排斥者は心理的痛みを感じ、それを十分に制御できないがゆえに不適応反応を起こすことが指摘されている(e.g., Smart Richman & Leary, 2009; 柳澤, 2011)。しかし、共感する側の個人に着目した場合、不適応反応を引き起こすのは心理的痛みではなく、その個人が知覚したネガティブ感情であった。さらに、抑うつ傾向の低さと幸福感の高さという個人差要因がネガティブ感情を抑えることが示された。他の個人差要因が影響を及ぼさなかった点も併せて考慮すれば、伝染した心理的痛みが個々人に及ぼす影響は、単に被排斥者と同様のものと考えることができないと考えられる。

上述したように、本研究では、抑うつ傾向の低さと幸福感の高さが共感する側の個人に生じうる不適応反応を抑える可能性があることを明らかにした。先行研究では、充実した対人関係を持つことによって、抑うつ傾向が低まり、幸福感が高まること指摘されている(Oishi, 2012)。この点を考慮すれば、共感という行為が求められる保育者にとって(無藤, 2007)、自身の周りにサポートネットワークが存在していることが重要な意味を持つと考えられる。さらに、保育者養成校に目を向けた場合、その教員は保育者を目指す学生が、家族や友人といったいろいろな対人関係の中で上手に生活していくための支援や指導、すなわち学生の人間関係力の育成に力を入れることが必要であろう。このように、本研究は保育者養成校における教育への示唆を提供するものである。その点においても本研究の意義は少なくないと考えられる。

最後に、今後の課題について述べる。まず、共感の正確さ(empathic accuracy; Ickes, 2001)に着目した検討である。抑うつ傾向の低さと幸福感の高さが共感する側のネガティブ感情を抑えることは示されているものの、現時点ではこのような特性を持つ個人が被排斥者の心理状態を見誤っている可能性を否定できない。本研究では、被排斥者に自身の心理状態について回答を求めている。この回答傾向と、共感実験の参加者の回答傾向を比較することによって、実験参加者が被排斥者の心理状態をどの程度正確に推測していたかが検討できる(Cote et al., 2011; Kraus, Cote, & Keltner, 2010)。抑うつ傾向の低い個人、あるいは幸福感の高い個人が、被排斥者の心理状態を他の人々と同程度に(もしくは、それ以上に)正確に推測しているかどうか追加検討する必要がある。次に、クラスメイト以外の他

者,具体的には,あかの他人(stranger)を被排斥者とした共感実験の実施である。Meyer et al. (2013)は,排斥された友人に対して共感する場合,共感する側の個人に前部帯状回背側部の賦活が認められるだけでなく,排斥された他人に対して共感を示す場合には,この賦活が認められないことを示している。この知見から示唆されるように,心理的痛みの伝染が友人・知人が排斥された場合に限定されるのか,あるいはあかの他人が排斥された場合にもそれが生じるのか検討する必要がある。この点については,本実験の参加者が所属する保育者養成校の他学年の学生を対象に実験を行うことで検討できると考えられる。最後に,保育者養成校に所属する学生以外を対象とした実験の実施である。上述したように,共感という行為は,保育の中で重要となるかわり方のひとつである(無藤,2007)。それゆえに,保育者養成校では,共感がより円滑にできるような授業方法や授業内容が採用されている。この点を考慮した場合,本研究の実験参加者は共感のトレーニングを受けた特定の人々と解釈されうる。今後は,保育者養成校以外の学生,あるいは発達段階の異なる人々を対象とした実験を行い,心理的痛みの伝染がどの程度一般化されるのか明らかにする必要がある。

引用文献

- Aron, A., Aron, E., & Smollan, D. (1992). Inclusion of Other in the Self Scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Côté, S., Kraus, M. W., Cheng, B., Oveis, C., van der Lowe, I., Lian, H., & Keltner, D. (2011). Social power facilitates the effect of prosocial orientation on empathic accuracy. *Journal of Personality and Social Psychology*. **101**, 217-232.
- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., Williams, K. D., (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, **302**, 290-292.
- Feeney, B. C., & Lemay, E. P. (2012). Surviving Relationship Threats: The role of emotional capital. *Personality and Social Psychology Bulletin*. **38**, 1004-1017.
- Gadassi, R., Mor, N., Rafaeli, E., (2011). Depression and empathic accuracy in couples: An interpersonal model of gender differences in depression. *Psychological Science*, **22**, 1033-1041.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成 - 妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- Ickes, W. (2001). Measuring empathic accuracy. In J. A. Hall & F. J. Bernieri (Eds.), *Interpersonal sensitivity: Theory and measurement* (pp. 219-241). Mahwah, NJ: Erlbaum
- 飯村直子・檜木野裕美・二宮啓子・松林知美・蛭名美智子・片田範子・勝田仁美・来生奈巳子・笠木忍・鈴木敦子・筒井真優美・中野綾美・半田浩美・福地麻貴子 (2002). Wong-Baker のフェイススケールの日本における妥当性と信頼性 日本小児看護学会誌, **11**, 21-27.
- Knowles, M. L., & Gardner, W. L. (2008). Benefits of membership: The activation and amplification of group identities in response to social rejection. *Personality and Social Psychology*, **94**, 101-110.

- Psychology Bulletin*, **34**, 1200-1213.
- Kraus, M.W., Côté, S., & Keltner, D. (2010). Social class, contextualism, and empathic accuracy. *Psychological Science*, **21**, 1716-1723.
- Kraus, M. W., & Keltner, D. (2009). Signs of socioeconomic status: A thin-slicing approach. *Psychological Science*, **20**, 99-106.
- Meyer, M. L., Masten, C. L., Ma, Y., Wang, C., Shi, Z., Eisenberger, N. I., Han, S. (2013). Empathy for the social suffering of friends and strangers recruits distinct patterns of brain activation. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **8**, 446-454.
- 森下葉子 (2007). 第 3 章 子どもと保育者のかかわり 岩立京子(編) 領域人間関係：事例で学ぶ保育内容 萌文書林 pp.57-82.
- 無藤 隆 (2007). 第 1 章 幼児教育の基本 岩立京子(編) 領域人間関係：事例で学ぶ保育内容 萌文書林 pp.11-32.
- 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, **50**, 283-290.
- Nordgren, L. F., Kasia, B., & MacDonald, G. (2011). Empathy gaps for social pain: why people underestimate the pain of social suffering. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 120-128.
- Oishi, S. (2012). The psychological wealth of nations: Do happy people make a happy society? Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- 坂田和子 (2000). 保育者の精神的健康に関する研究—保育所職員の日常的ストレスについて— 聖心ウルスラ学園短期大学紀要, **30**, 65-71.
- Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multimotive model. *Psychological Review*, **116**, 365-383.
- 柳澤邦昭 (2011). 社会的排斥経験後の適応過程における心理社会的資源の機能の検討 広島大学大学院総合科学研究科博士論文(未公刊)
- Yanagisawa, K., Masui, K., Furutani, K., Nomura, M., Ura, M., & Yoshida, H. (2011). Does higher general trust serve as a psychosocial buffer against social pain? : An NIRS study of social exclusion. *Social Neuroscience*, **6**, 190-197.
- Yanagisawa, K., Masui, K., Furutani, K., Nomura, M., Yoshida, H., & Ura, M. (2013). Family socioeconomic status modulates the coping-related neural response of offspring. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **8**, 617-622.
- Zaki, J., & Ochsner, K. (2012). The neuroscience of empathy: progress, pitfalls, and promise. *Nature Neuroscience*. **15**, 675-680.

